

とはいっても見知らぬ土地で霧に遮られ、恐る恐る歩くしかない。岸壁から海に身を落とすようには思えないが、それでも心細さや気味悪さは残る。

音がない。霧が音の響きを吸い込んでしまうからだろうか。手探りしながら前へ前へと、コンクリートの地面を踏む。まるで少し明るいお化け屋敷みたいだ、と思っていたところに人の気配がして思わず身構えた。背筋がゾワッとする。立ち止まって身をかがめ、目をこらすと、霧の中にシルエットがぼんやりと浮かぶ。

人だ――

じっとしている。散歩に来ている住民と見分けて、少しホッとする。それにしても何をしてるのか。音がしないように、一步、また一步、近づく。足元から見あげていくと、海に向けて両手を胸の前で組み、うつむいているように見える。女性は何かに向かって祈っているようだった。

女性に気を取られていると、さらに奥から人の気配がした。いや、その前に小さな影が足早に近づいてくる。足を止めて再び身構える。

犬？の散歩――

少年が犬を連れて霧の向こうから現れる。スラッとした長身の少年だ。女性の方に近づいていく。

母子か――

少年が渚に気づき、何者かと、しばしじっと見つめる。思わず恐縮した渚が、おはようございます、とささやくように軽く会釈をすると、つられて少年も、どうも、と会釈を返した。

そんなやりとりに気づいて、女性が我に還ったように顔を上げ、ふり返った。

「敦土」

ふわっとした調子で呼ばれた少年は女性の方に向き直り、連れていた柴犬に「ロス」と呼びかけ、母親と思しき女性と霧の向こうへと消えていった。

この島の人々は毎朝、こうやって日の出を拝むのだろうか、と想ったりもしたが、その母子しかいないことを考えると、そうでもないかと思った。

それにしても、深い霧だ。

＊

「いらっしゃいませ」

横に長く設計された、壁一面ガラス張りのイタリアンレストラン。窓ガラスの向こうに一望できる、雄大で長閑な瀬戸内の景色。その一番端の席に渚は座り、美海と弘章を待つ。前日の別れ際に渚が誘うと、弘章が、地元の俺らなんかはなかなか行けないから、と言ったりクエストによるものだった。

立派な観光地であれば平日の経営も成り立つのだろうが、こんな小さな島ではどうだろうと考えていたところに二人が入ってきた。軽く手をあげて二人に合図をする。

「ごめんね、家の用事で忙しいのに」

「いや、渚さんこそ、ヒロがええ加減なこと言うてしもて。本当にすみません」

「えっ、俺のせい？」と言って、弘章がおどけるように、俺？俺？と愛想を振りまく。それを美海が、何馬鹿なことやってんの、と制止する。そんな二人を前に、渚が吹き出す。

席に座り、パスタやピザを注文する。

渚は前日の様子から、二人が特別な間柄ではないように感じてはいたが、その距離感は限りなくゼロに近く感じられ、どういった関係か気になっていた。

「ところで二人って、付き合ってたりする？」

間があく。訊いてはいけないことを訊いてしまったのかと、渚は一瞬息を飲む。が、すぐに、口を半開きにしていた美海が大笑いし、きっぱりと答えた。

「ちゃうわ」

あまりの簡潔な回答に、再度笑みが溢れる。

「そうなんだ」

「私ら島の同級生なんやけど、三人だけの」

「三人？もう一人いるの？」

「はい、おるんやけど、なぁ」

「うん、もう一人おるんやけど、高校に上がるぐらいから家に引きこもって」

島民が今の何倍もいた頃は、一学年に一〇〇人ほどいたらしいが、今はもうそれも片手にも満たないと美海は言った。同学年に三人いることも珍しい方だという。急激な少子化に渚は茫然となる。全国の他の地方よりも圧倒的に少子・高齢化、過疎化が進行している。三人も中学までは島内でいたが、高校からは、隣の小豆島にある高校まで毎朝夕、船で通っているという。船の便に合わせての生活は、部活動などにも制

約が生じる。決して便利とはいえない。

「それで高校卒業したら、みんなどうするの？」

「まあ、それぞれかな。島の中の仕事は限られとるし、やっぱり外に出て行くみたいな」

「そうなんだ。そこに移住者が来るって、なんか皮肉ね。——二人は、どうするの？」

そう言うとき、美海と弘章は互いを見て、どちらが先に口にするか戸惑う様子を見せた。そして弘章が答える。

「もう進路決めんといかんのやけど、まだ悩んどって。親は好きなようにいうて言うてくれるんやけど、やっぱり県外の大学かなと」

「私も、県外かな。島には何もないから——」

ためらいがちに、呟くように言った。

少子化が進む過疎地は、全国どこも同じだ。それが早いか遅いかの違いだけで。

「さっき言ってたもう一人の子は？」

渚の問いかけに、思い出したように美海が答える。

「あっくんは、敦士っていうんやけど。私と同じ地区で、うちとは少し離れたところなんやけど、あ、渚さんが泊まっとった民宿の近くやわ」

「そういえば今朝、二人と同じ歳格好くらいの子を見かけたな」

「どんな感じの子やった？」

「スラッとして、お母さんぽい人と一緒だった。犬の散歩してた」

「犬いうて、茶色の柴犬やなかった？」

「小さい、そうそう、柴犬だった」

「それロスやわ。あっくんやそれ」

「そんな感じの名前だった」

「あっくんやな」

「三人とも小さいときから一緒やから、もう十年以上一緒なんやけど。高校はなんとか入れたんやけど、あんまり来んようになって。気にはなっとんやけど」

「理由は？」

二人顔を見合わせ、困ったように首を振る。そうなんだ、と相づちを打ち、遠くの海に目をやる。

「一つ、いいですか？」

美海が渚の意識を引き寄せる。

「渚さんは、なんでここに来たんですか？」

「ここってというのは、産廃の見学ってこと？」

事件が表面化した当時は、多くの見学者が研修として来島していたという話を、前日に石川から聞いた。しかし、それも昔の話で、今来る大学生などの若者を中心とした観光客のほとんどは、産廃の見学には行かない。芸術祭の方だ。豊島事件そのものすら知らない。そのことを、美海も弘章も、肌で感じ取っていた。見学者が多かった頃は、興味本位といえども、この島に関心を寄せてくれているという共感性のようなものが感じられたが、今はそれが無い。物見遊山のように島にやってきては、好き勝手にあちこちに立ち入り、荒らしていく。

「なんか、覗き見されとるみたいで、嫌やな」

受け入れる側の島民として、言っではいけないことを言ってしまった、といった罪悪感のような空気が、弘章から溢れ落ちた。

「今、私、大学で環境問題について勉強してるの。そこでSDGsのことについても勉強してて。SDGsって、分かる？」

「言葉だけやったら」

「『持続可能な開発目標』って言って、国連が提唱してるんだけど。えーと、どこから言えばいいかな」

難しい話を避けるように言葉を選ぶ。

「ゴミの出しっぱなしっていうのは、私は無責任だと思ってて。私たち買った側には、買って使った側としての責任はあると思うの。だけど、作った側には作った側の、販売許可を出した側には販売許可を出した側の、売った側には売った側の責任があると思うのね」

「その話いうて、なんか豊島事件と似とるな」

「うん、そう思ってくれていい。でもね、最近になるまで、ううん、今でも買って使った側の責任になってる気がするの。つまり、作ったら作りっぱなし、許可を出したら出しっぱなし、売ったら売りっぱなしになってるように思うの。でもそれって、無責任ていうか、買った者だけに責任を押しつけてる気がするのね。それはやっぱり違うんじゃないかっていう気がして」